

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34407

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21760508

研究課題名（和文） 日本統治時代台湾における環境イメージの変容に関する研究

研究課題名（英文）

A study on the change of environmental image in the Japan rule age Taiwan

研究代表者

足立 崇（ADACHI TAKASHI）

大阪産業大学・工学部・准教授

研究者番号：80309179

研究成果の概要（和文）：

台湾東南海 74km に位置する小島、蘭嶼は日本統治時代「紅頭嶼」と呼ばれていた。ここにはヤミと呼ばれる人々が山裾の傾斜地に暮らしている。1897 年 3 月、日本は最初の紅頭嶼調査を行い、1903 年 10 月にその後のヤミの生活環境に大きな影響を与えたベンジャミン・セオール号事件が起こっている。本研究では当時の写真や史料をとおして、調査および事件の詳細などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Lan Yu (Orchid Island in English) is a small island, 74km off the southeast coast of Taiwan. When it was under Japanese occupation, it was known as Kotosho. In this island the Yami situate their villages in gentle slopes at the foot of mountains. Japanese Government made the first investigation of Kotosho in March 1897. The Benjamin Sewall incident which greatly influenced the Yami's living environment occurred in October 1903. In this study I clarified the details of this investigation and the incident through many photographs and historical records.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：台湾、日本統治時代、原住民族、写真、紅頭嶼

1. 研究開始当初の背景

近年、台湾人意識の高まりの中、台湾固有の歴史が見直され、日本統治時代に対する見直しもされるようになってきている。それとともに、台湾総督府公文類纂など公文書の

整理や情報公開も進み、日本統治時代台湾における都市および建築に関する研究が、台湾や日本の研究者によってさかんに行われている。

筆者はこれまで台湾原住民族のヤミと呼

ばれる人々の土着の住まいのあり方を、実地調査にもとづき研究してきたが、近年はこうした土着的なるものが日本統治時代にどう変容したかを総督府公文書などの史料をとおして究明している。一方で、日本統治時代の台湾において都市が変容していくとき、建築史研究者や建築家がそこにどのように関わったかを、『台湾建築会誌』や総督府公文書などをとおして明らかにする研究も行っている。

こうしたなかで、日本統治時代台湾における近代化の意味を、都市性と土着性との関係、日本と台湾との関係、さらにその背後の国際的な関係から考えるようになってきた。

2. 研究の目的

本研究は、日本統治時代の台湾における都市性と土着性との関係に着目し、近代化の意味を究明するものである。ここでは、絵葉書や写真、写真帖などの画像資料をとおして、環境イメージの変容を捉えていく。

台湾の都市や地方において見られる都市性と土着性との関係に着目し、その環境イメージがどのように変容したかを明らかにする。このとき、都市性と土着性とを二項対立的に捉えるのではなく、その間の関係を捉えていく必要がある。また台湾の地方における都市性と土着性、都市における都市性と土着性、「内地」としての日本と「外地」としての台湾、といった重層的な観点から捉えていく必要がある。それは突き詰めていけば、「西洋的なもの」、「日本的なもの」さらには「台湾的なもの」を問うことにもつながる。

3. 研究の方法

本研究は画像資料はもちろんのこと、当時の社会状況や政策、国際関係なども踏まえて進めていく必要がある。たとえば絵葉書や写真帖をはじめとする画像メディアの発達、台湾におけるツーリズムの発達とも関係している。曾山毅氏の『植民地台湾と近代ツーリズム』(2003)によれば、1908年の縦貫鉄道開通をはじめとする交通基盤の整備によって台湾におけるツーリズムが発生し、1930年代には観光振興策がとられ、旅行者が増大しツーリズムがさらに発達したという。1908年といえば総督府土木局の安江正直が台湾で最初の建築史調査書を提出した翌年である。それから台湾建築会の発足した1929年まで、台湾建築史研究が停滞する一方で、ツーリズムが発達していたのである。ちなみに台湾原住民族建築研究で有名な千々岩助太郎が調査を始めたのは1935年頃で、この年は始政四十周年記念台湾博覧会が台北を中心に開催され、台湾内外から旅行者が押し寄

せ、台湾ツーリズムが急速に発展した年でもあった。この年には日本建築協会、台湾建築会、朝鮮建築会、満州建築協会の四会連合第2回大会も台北で開催され、内外の研究者の交流が行われている。ツーリズムの発達によって、環境イメージにも大きな変化が現れたと予想される。本研究はそうした社会的変化も視野に入れつつ遂行する。

なお、ここで扱う史料はいずれも統治されていた側のものでなく、統治していた側のものである。それゆえ、そこには統治していた側の意図や「まなざし」といったものも反映されていると予想され、近代化のはらむ問題も浮き彫りになると考えている。

4. 研究成果

(1) 1897年3月の紅頭嶼調査写真について

1897(明治30)年10月から12月にかけて、鳥居龍蔵は紅頭嶼(現:蘭嶼)で人類学的調査を行い、写真撮影している。鳥居の紅頭嶼調査写真は、『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ』(第2部)[鳥居龍蔵写真資料研究会 1990]にまとめられているが、近年、皆川隆一によってその内容の詳細について解明が進められている。また、范如苑によって鳥居龍蔵写真の民族学的研究における意義に関する研究も行われている。

鳥居龍蔵調査写真の分析が進む一方で、それ以前の1897(明治30)年3月に総督府による最初の紅頭嶼調査が行われ、そこで写真撮影がされたこと、その内大小90枚の写真が拓殖相への報告文書として送られていたことが明らかになってきている。しかし、これまで3月調査で撮影された写真が具体的にどのようなものであったかは、明らかにされてこなかった。

本研究では、3月調査時に撮影された写真とそれにかかわる写真説明資料などの所在を明らかにし、それらをとおして写真が誰によって撮影されたもので、その内容が具体的にどのようなものであったかを明らかにした。これは、日本人が最初に紅頭嶼を訪れ、調査撮影した写真であり、資料としての貴重さはもちろんのこと、台湾を統治する側の意図やまなざしを知る上でも貴重な資料である。また、当時の新聞記事などをとおしてこれらの写真が写真帖としてまとめられたことを明らかにした。台湾で出版された写真帖の変遷を作成した結果、これが台湾の写真帖としてかなり早い時期のものであることが分かった。

(2) ベンジャミン・セオール号事件をとおして見るヤミの生活環境の変容

日露戦争間近の1903(明治36)年10月、米国船ベンジャミン・セオール号はシンガポールから上海に向け航行中、台湾南沖合で台風に遭い、航行の自由を失った。乗組員23名は沈没を恐れ棄船し、附属のボートに避難した。船長たちの乗った1艘のボートは鷲鑿鼻に漂着し救助されるが、もう1艘のボートは紅頭嶼(現:蘭嶼)附近を漂流し、一部の乗組員は紅頭嶼に漂着、他の乗組員は溺死してしまう。その後、日本による1回目の捜索でフィリピン人1名とロシア人1名の生存者を救助し、日本と米国による2回目の捜索で日本人3名の生存者を救助する。米国は生存者の証言から溺死の原因を紅頭嶼に住む先住民ヤミによる強奪と判断する。翌年1月、米国からの要請を受けた日本は紅頭嶼へ討伐隊を派遣することを決定し、加害者がいるとされる3集落を捜索し、10名を逮捕、武器を押収し、家屋13戸を焼き払った。これをベンジャミン・セオール号事件という。この事件はヤミにとって国家による力の介入を受けた最初の出来事であり、その後の日本による紅頭嶼統治のあり方に大きな影響を与えたものである。また、日米の国際関係の中で推移した側面もあり、国際的に紅頭嶼が問題になった事件でもある。しかし、これまで事件の概略は知られていたものの、その詳細な経過については明らかにされてこなかった。本研究では日本統治時代におけるヤミの生活環境の変容をみていくために、この経過を時系列的に明らかにした。また、ベンジャミン・セオール号はもとより、定期船、軍艦、地図などをとおして、当時の海上交通との関連についても明らかにした。さらに、台湾が日本に統治された1895年からベンジャミン・セオール号事件が起こる1903年10月までの日本と蘭嶼との関係についてもまとめ、警察派出所の設置経緯についても明らかにした。

ベンジャミン・セオール号事件に関する資料としては、台湾総督府の公文書『台湾総督府公文類纂』(4749冊-2号、4810冊-1号、4811冊-1号、4814冊-3号)がある。これは事件に関する多くの文書を含んでおり、現在国史館台湾文献館にて整理保管されている。また、海軍省の公文書『公文雑輯』(M36-4)にも事件に関する文書が含まれている。これは防衛研究所図書館において整理保管されている。伊能嘉矩(1867-1925)は1917年の『東洋時報』(225, 226, 228)に「台湾外交史料 ベンジャミン・セオール号事件」と題する三稿を報告している。さらに自らが編纂した『理蕃誌稿』第1巻(1918)にも、15頁にわたり同文が記載されている。これらはそ

の内容から総督府公文書にもとづいて書かれたものと推測される。『台湾日日新報』には事件発生から事件終結にいたるまでに21編の記事が掲載されている。ダグラス・エガン(1902-?)のSHIP-BENJAMIN SEWALL-(1983)には、ベンジャミン・セオール号の造船、進水式からその後の航海、ベンジャミン・セオール号事件とその後についてまで記されている。余光弘・董森永の『台湾原住民史 雅美族史篇』(1998)にも事件にかんして6頁にわたる記述がある。『台湾原住民史 雅美族史篇』は、ヤミ出身の牧師である董森永と中央研究院民族学研究所の余光弘によるもので、ヤミの人が体験してきた歴史を口述や資料をもとに記述した、いわばヤミの側から見た歴史といえる。

本研究では、『台湾総督府公文類纂』、『公文雑輯』、『理蕃誌稿』、『台湾日日新報』、SHIP-BENJAMIN SEWALL-など日米の資料を中心にして、事件の経過を整理し明らかにした。『台湾原住民史 雅美族史篇』(1998)はヤミの口述による事件の記録であり、内容は他の資料にない具体的なものもあり重要であるが、事件の発生した月が日米の資料と半月以上も異なり、詳細な月日の記載もほとんどないため、本研究に組み込むことはできなかった。よって、これはあくまで日米の資料をとおして見たベンジャミン・セオール号事件の経過である。

(3) 千々岩助太郎の台湾原住民族建築研究について

建築学者の千々岩助太郎(1897-1991)は、日本統治時代台湾において1930年代から台湾原住民族建築を調査研究したことで知られている。千々岩の調査研究は多くの論文として発表され、後に『台湾高砂族の住家』(1960)としてまとめられている。1962年にはこれに加筆し、博士論文としてまとめられ九州大学に提出されている。博士論文は主論文第1部(建築形式の分類)と主論文第2部(周辺地域との比較)からなる。研究目的としては台湾原住民族家屋の建築手法を究明することであった。主論文第1部では調査資料を7族ごとに分類し、各族の家屋を床形式と仕上げ、平面形式、壁の仕上げ、屋根形式と仕上げ、寝台の障壁の有無、穀倉の位置によって整理している。その結果、タイヤルの住家形式は4つのタイプに、サイシャットは1つ、ブヌンは2つ、ツォウは2つ、パイワンは6つ、アミは2つ、ヤミは1つにそれぞれ分類されている。ちなみに、紅頭嶼ヤミの建築について建築学者として最初に調査研究を行ったのも千々岩である。千々岩は1937年4月と1940年6月に計48日間、

紅頭嶼に滞在し調査を行っている。ヤミの家屋に関しては主屋に焦点が置かれ、主屋の構造、施工法や部材の名称、形状、材料、内部空間の名称さらに寸法体系などを記している。主屋は床が階段式、板張、平面が復室、矩形、平入となっており、壁が板、茅で作られ、屋根が切妻、茅葺とされている。主論文第2部では、台湾原住民族の家屋を考察し、日本及び南西諸島その他南方地域の民家との比較およびその関連性の探究を試みている。しかし、「他地域との比較研究はかなり至難であるという結論に到達した」とあるように、比較は断片的なものにとどまっている。

近年、こうした千々岩の調査研究は日本や台湾において見直され、評価されてきている。たとえば、日本では角田憲一によって調査資料や調査そのものの詳細な分析が進められ『千々岩助太郎による台湾原住民住居調査に関する研究』（九州大学博士論文2007）としてまとめられており、台湾では寄贈された千々岩の調査資料（実測図面、写真など）が台北科技大学で整理、デジタル化され、千々岩助太郎デジタル博物館として公開されている。千々岩の調査資料は、これまでも台湾原住民族の伝統建築復元や、研究者の研究資料として有効に活用されてきたが、原住民族の建築がほとんど失われた今日にあってその価値は今後ますます高まっていくであろう。

本研究では、こうした貴重な資料を残した千々岩の研究の背景に焦点を当て、訪台以前の日本においてどのような建築教育を受け、その建築観が形成されたかを、当時千々岩が建築教育を受けた名古屋高等工業学校に関する資料などから考察した。また、台湾に赴任した後、台湾での山行や台湾建築会とのかかわりなどによってその建築観がどのように展開したかを、千々岩の著述や関連する資料から考察した。それは端的に言えば、西洋建築を規範とした美から台湾原住民族建築の土着的な美の発見への道のりであった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 足立崇、ベンジャミン・セオール号事件の経過（1）—台湾ヤミの生活環境史—、大阪産業大学論集 人文・社会科学編、査読無、14号、2012、73-96
- ② 足立崇、ベンジャミン・セオール号事件の経過（2）—台湾ヤミの生活環境史—、大阪産業大学論集 人文・社会科学編、査読無、15号、2012、131-155

〔学会発表〕（計2件）

- ① 足立崇、ベンジャミン・セオール号について—日・雅交流史の一面—、第37回FYCS研究会、2010年3月6日、慶應義塾大学
- ② 足立崇、台湾ヤミの住まいをめぐって、第27回建築論研究会、2011年3月26日、京都大学

〔図書〕（計3件）

- ① 足立崇、中央公論美術出版、台湾ヤミの住まいの建築論、2010、266頁
- ② 足立崇、他（吉原直樹・斉藤日出治編）、東信堂、モダニティと空間の物語—社会学のフロンティア—、2011、93-119
- ③ 足立崇、他（日本建築学会編）、風響社、フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク、2012、73-86、229、232、236

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

足立 崇 (ADACHI TAKASHI)
大阪産業大学・工学部・准教授
研究者番号：80309179

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：